事　例 項　目	01 障害の特性理解・実態把握 05 学校体制作りのサポート
概　要	**読み書き障害の診断を受けた生徒への対応**
事　例 提供校	高校：東部地区　全日制 特支：沼津視覚特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・読み書き障害の診断を受けた生徒及び医療機関から、授業や試験での PC の使用の希望が出た。どのように対応していけばよいか。 ・保護者と医療機関は積極的で高等学校としても可能な部分は対応したいが、本人の自覚と積極性がまだ育っていない。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・合理的配慮に基づき保護者、本人、医療機関から申し出があった場合、PC の使用については合理的配慮に該当し必要とされることが多い。試験における PC の使用方法や範囲については、センター試験に準じた配慮をしていくのが良いことを伝えた。 ・実際に使用する上での配慮など、保護者、本人とまずは話し合い、さらにすり合わせが必要な場合、医療機関と話をするとよいことを伝えた。

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・本人の特性、視覚に関する障害の特徴を踏まえ、家庭から申請された配慮内容を「合理的」と判断するための材料や考え方について、具体的な助言を受けることができた。そのため、関係する様々な立場の教員と協議をするのに大いに役立った。 ・医師による指示書に基づき、生徒本人・保護者と話し合う際のポイントを事前に助言を受けられたことで、本件に対して筋道を立てて対応することができた。結果的に、本人・保護者・高等学校の三者とも納得の上、校内での配慮が生徒卒業までスムーズに進んだ。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・高等学校のコーディネーターが、医療機関まで足を運んだり、保護者面接も実施したりするなど、具体的な方法についても積極的に取り組んでいた。 ・読み書き障害での授業や試験への配慮は、ICT 機器の活用と切り離せないので、そういった部分の専門的な知識と技能が特別支援学校側に必要なことを改めて感じた。 ・大学受験への配慮は、先行事例を持つ大学に連絡できる人がいることで、具体的な事例を知ることができた。

まとめ
・PC 利用について高等学校が校内で検討の上、充分な配慮を展開した。内容は充実していて、配慮開始までの時間もスムーズであった。 ・周囲の配慮への希望と、本人の自覚が乖離している場合、本人の意識と配慮の内容がマッチしていないと、配慮提供側の準備が活用されないことがある。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01　個に関する指導** 06　ケース会議・研究協力・特別支援教育に係る情報発信
概　要	**人工内耳または補聴器装用児の聞こえに関する相談**
事　例 提供校	高校：中部地区　全日制 特支：静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト** ・補聴機器を装用している生徒の聞こえの実態について教えてほしい。 ・当該生徒の聞こえの実態に合わせた聴覚的支援について、授業参観をとおして詳しい情報がほしい。補聴援助システム（ロジャー）の使用方法についても改めて確認したい。 ・難聴児が複数人在籍しているため、全校職員向けの難聴児支援講習会を開いてほしい。 **特別支援学校からの支援・助言**（センター的機能の活用） ・高等学校訪問、授業観察　　・教職員対象の難聴児支援講習会の実施 ・担任及び特別支援教育コーディネーターへの情報提供 （聴力測定結果から分かる聞こえの実態、補聴機器や補聴援助システムに関する情報、聞こえに関する配慮事項、大学入学共通テストでの配慮申請に関する情報等）

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント** ・当該生徒３人は、中学校・本人・保護者ともやりとりを重ねながら校内支援体制を整え、その後も定期的に支援内容の確認を重ねてきました。しかし、今年度の職員研修の依頼をきっかけに、ケース会議等で当事者が本人の聞こえの様子を的確に理解しづらい状況があることを説明していただき、生徒も職員も改めて支援の在り方を見直すことができました。 ・生徒の聞こえの変化を客観的に検証するためにも、聴覚特別支援学校と高等学校とが定期的に関わっていく体制を維持する必要性を痛感しています。また同時に、それを生徒自身・保護者に理解してもらう枠組みも必要だと強く思いました。 **特別支援学校　担当者のコメント** ・静岡聴覚特別支援学校の幼稚部や小学部、通級指導教室を利用していた生徒達であり、高等学校での聞こえの環境や生活の様子を知ることができたことは、今後の継続的な難聴児支援につながるきっかけとなりました。 ・難聴児支援講習会で、多くの教員に難聴児の学校生活における困難さを周知できたことを、大変有難く感じています。

まとめ

特別支援教育コーディネーター間で連絡調整を行い、高等学校訪問や難聴児支援講習会、静岡聴覚特別支援学校での教育相談を行いました。特に３年生の生徒に関しては、大学入学共通テストの配慮申請手続きに関する情報を伝える際に、どのような場面でどのような支援が必要になるのか、確認することをとおして本人の難聴理解を深めることができたと感じています。令和５年度在校の２人の難聴支援についても、継続的に連携を強化していきたいと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01　障害の特性理解・実態把握** 02　個に関する指導
概　要	**補聴器装用児の聞こえについての相談**
事　例 提供校	高校：中部地区　全日制 特支：静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト** ・補聴器を装用している生徒の聞こえの実態について教えてほしい。 ・当該生徒の聞こえの実態に合わせた聴覚的支援について、授業参観をとおして詳しい情報がほしい。補聴援助システム（ロジャー）の使用方法についても改めて確認したい。 **特別支援学校からの支援・助言**（センター的機能の活用） ・高等学校訪問、当該生徒の授業観察 ・担任及び特別支援教育コーディネーターへの情報提供 （聴力測定結果から分かる聞こえの実態、補聴機器や補聴援助システムに関する情報、聞こえに関する配慮事項等）

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント** ・今までにも聴覚特別支援学校の支援を受けながら本校に在籍していた難聴児もいたと思いますが、その際もはっきりこちらが本人の情報を把握していたわけではありませんでした。聴覚特別支援学校から高等学校訪問をしてくださったことで、教員の意識づけができました。 ・当該生徒は最前列に着席し、授業中はロジャーを本人が教師に渡して使用し、更に他の生徒が発言する時はロジャーを渡してマイクのように使用するようになりました。 ・聴覚特別支援学校の先生に出張先で御挨拶させていただいたり、メールでも御連絡をいただけたりするので、養護教諭も本生徒のことをこれまで以上に気にかけられるようになっています。細かい情報も共有できるようになり、こちらも困ったときは聴覚特別支援学校から支援していただける安心感があります。 **特別支援学校　担当者のコメント** 静岡聴覚特別支援学校の難聴通級指導教室を利用していた生徒であり、保護者からの依頼がきっかけで、高等学校入学後の難聴支援に携わることができました。学習環境が大きく変化していたため、本人の聴力レベルと環境に合わせた支援方法を伝えました。お渡しした資料を活用していただき、教科担任等、本人の指導に携わる多くの先生方に向けて、本人の聞こえにくさと聴覚的支援の大切さに対する理解を広げていただきたいと思います。

まとめ

先方の養護教諭と静岡聴覚特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが窓口となり、今回の連携につなげることができました。中学生、高校生の間は心の成長や変化が大きく見られる時期であり、周囲からの印象を気にするようになると、本人が希望する支援方法や内容が変化する場合があります。一度きりの連携ではなく、継続的に支援をしていけるように、引き続き連携しながら本人の学校生活の充実に向けた支援をしていきたいと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01　障害の特性理解・実態把握** 02　個に関する指導
概　要	**人工内耳装用児の聞こえについての相談**
事　例 提供校	高校：中部地区　全日制 特支：静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト** ・人工内耳を装用している生徒の聞こえの実態について教えてほしい。 ・当該生徒の聞こえの実態に合わせた聴覚的支援について、授業参観を通して詳しい情報がほしい。また、補聴援助システム（ロジャー）の使用方法についても改めて確認したい。 ・大学入学共通テストの配慮申請について教えてほしい。 **特別支援学校からの支援・助言**（センター的機能の活用） ・高等学校訪問、当該生徒の授業観察 ・担任及び特別支援教育コーディネーターへの情報提供 （聴力測定結果から分かる聞こえの実態、人工内耳や補聴援助システムに関する情報、聞こえに関する配慮事項、大学入学共通テストでの配慮申請に関する情報等）

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント** ・ロジャーに関すること以外にも、教室内での音に関して健常者には気付かない問題について伝えていただき、今後の指導の参考になりました。 ・当該生徒が３年生ということで、進路に関しても色々御助言をいただき大変感謝しております。今後も連携を取り合い、必要とあれば早めに助言をお願いしていきたいと考えております。 **特別支援学校　担当者のコメント** ・人工内耳装用者は静寂下では、話声を問題なく聞き取れることが多いのですが、騒音下での聞き取りは中等度難聴程度の困難さが生じると言われています。今回の学校訪問でお伝えした内容を基に、本人の障害に対する自己理解がさらに深まるように、本人に対する働きかけを日常的かつ継続的に行うことが望ましいです。 ・日程調整等、特別支援教育コーディネーター間で連絡を取り合い、スムーズに連携することができました。

まとめ

　総合教育センターで行われた特別支援教育コーディネーター研修会をきっかけに、今回の支援につなげることができました。当該生徒は３年生であり、もっと早い段階での支援が望ましいのですが、共通テストに関する情報等を合わせて伝えることができ、良い連携を図ることができました。

　難聴児の支援については、難聴児を担当する機会がない教員にとっては関係ない問題ととらえられがちです。今回のような在籍校訪問の際には、担当の教員から、関係する教員への情報伝達によって、難聴児の聞こえに関する配慮の理解が少しでも広がることを願っています。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01　障害の特性理解・実態把握**　02　個に応じた指導
概　要	**校内研修会の学びを生かした継続的な支援体制づくり**
事　例 提供校	高等学校：　中部地区　全日制 特支：　静岡県立静岡北特別支援学校

事例の内容

高等学校からのリクエスト

・特別支援教育の周知と発達障害の特性理解を促進さるための校内研修会実施を依頼。
・困難事例の相談及び支援方針の検討。

特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

特別支援学校のセンター的機能を生かし、高等学校からのリクエストを踏まえ、以下の３点を行いました。

①特別支援教育の動向や発達障害の特性理解と支援方法についての講義。
講義内容は「特別支援教育に関する動向と高等学校における特別支援教育の必要性」「発達障害に関して」「実態把握の大切さと生徒の“良さ”を生かした指導」について具体的な事例を交えてお話をしました。

②高等学校の職員向けのアンケート調査の実施。特別支援教育や発達障害に関する理解の促進や高等学校内の職員の困りごとの把握。
高等学校の職員向けのアンケート調査は、研修会後と６カ月後の年に２回行いました。
１回目のアンケート調査では、以下の記述が見られました。
・「今までは、『だらしない』『やる気がない』と思っていたが、配慮を考えたい。」
・「個々の実態把握をする方法を知りたい。他の先生と情報共有の大切さが分かった。」
２回目のアンケート調査では、困難事例について生徒への対応に関する具体的な相談が挙げられました。

③特別支援教育コーディネーター間の対話による、困難事例生徒への対応方法の検討。
困難事例生徒への対応方法の検討では、実態把握表を使い、多面的な実態把握と生徒の良さを生かす支援方法の考察を行いました。

センター的機能を活用した感想

高等学校　担当者のコメント

全日制高等学校とはいえ様々な生徒が在籍し、中には明らかに支援が必要な生徒も見受けられます。そのような生徒に対し適切な指導を行うための心構えや手法について講義をしていただき大変参考になりました。課題としては、学年間の「引継ぎ」であり、今後考えていければと思います。今後も支援が必要な生徒に対し継続的に助言をいただき生徒のより良い将来へとつなげていきたいと思います。

特別支援学校　担当者のコメント

今回は、高等学校からの研修会の依頼を受けて、①講義の開催、②アンケート調査、③特別支援教育コーディネーター間の対話による事例生徒への対応方法の検討を行いました。担当者としては、研修会として講義のみで終わるのではなく、アンケートの実施と特別支援教育コーディネーター間による対話を行い、さらなる連携の強化を図りたいと考えました。

依頼を受けた１回の講義をきっかけとして、その後のアンケート調査や事例検討と続けてつながりを持つことができたことで、高等学校と特別支援学校の特別支援教育コーディネーター同士が継続的に連携することができました。高等学校における学年間の「引継ぎ」の難しさという新たな課題も見えてきているので、今後更に連携を継続する中で来年度以降も共に取り組んでいけたらと考えます。

まとめ

今後も互いにいつでも連絡を取り合える身近な学校として継続的に連携を図り、特別支援教育の支援体制の構築につなげることができたらと思います。また、困難事例生徒への対応については、成育歴や家族構成等を含めた多面的な実態把握と生徒の“良さ”を生かす支援を広めて欲しいと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	01 障害の特性理解・実態把握　**02 個に関する指導**　05 学校体制づくりのサポート
概　要	**ワクチン副反応による左麻痺がある生徒への支援方法等について**
事　例 提供校	高校：　中部地区　全日制 特支：　静岡大学附属特別支援学校　中央特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・「コロナワクチン接種後の副反応で、左半身が麻痺し、体位性頻脈症候群と診断を受けた生徒がいる。実技が主となる授業があるため、左手の麻痺に対して補助的な支援を入れることで、実技にも取り組めるようにしたい。」と依頼しました。 ・現在、登校も難しい状態なので、登校できるように特別支援学校や医療機関などの関係機関と連携していきたいと考えています。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・実技や資格取得に際して、必要な支援を整理することが大切であることを伝えました。麻痺がない右手を使って、左手の不自由さをカバーできるような支援方法も伝えました。例えば、製図するときに左手ではなく、重石を右手に使って操作するようにすることや、右手のみで、上下左右の定規を移動できるような道具はないかどうかなどを提案しました。

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・他の生徒の実技の様子を見てもらってからのアドバイスだったので、具体的な情報を得られて良かったです。いろいろな支援方法を考えていきたいと思います。今後も支援をお願いします。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・実技への支援についても必要に応じて、継続的に相談していくことになりました。また、特別支援教育コーディネーター間でもアイデアを出し合い、当該校の特別支援教育コーディネーターとも連絡を取り合うことになりました。 ・今後、進路選択もあるので、肢体不自由特別支援学校の卒業生の事例など情報交換を進めていきたいと思います。

まとめ

麻痺がある生徒に対する具体的な支援を当該校の環境に合わせて相談・検討することができました。実技が難しくなったことによる生徒の気持ちに寄り添いながら支援していくことで、生徒が安心・安全に登校できることを期待しています。

連携する特別支援学校と高等学校から肢体不自由特別支援学校との連携につながり、３校の特別支援教育コーディネーターと連携関係を確認する機会となりました。今回の相談をきっかけとして継続的に生徒に対して支援することが望ましいと考えています。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01 障害の特性理解・実態把握**　03 個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と活用 05 学校づくりのサポート
概　要	**高等学校教員の研修への対応**
事　例 提供校	高校：　西部地区　全日制 特支：　浜松特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・前任校では教育相談業務に携わっていました。特別支援学校高等部の授業を見学させていただくとともに、教育相談体制や外部機関との連携等についてお話を聞くことで学びを深め、今後に生かしていきたいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・特別支援学校におけるセンター的機能と役割、教育相談の実際、外部との連携について、情報提供しました。 ・「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」の作成やそれをもとにした授業づくりの方法等を説明しました。 ・本校高等部の作業学習を参観してもらいながら、高等部の教育や障害のある生徒の実態把握の仕方、支援の実際を説明しました。

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・学んだことを養護教諭と共有し、教育相談や支援の必要な生徒の対応に生かしていきます。 ・特別支援学校高等部の授業を実際に参観させていただき、生徒の実態の捉え方や支援方法について学ぶことができました。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・所属高等学校における教育相談体制や支援が必要な生徒のサポート体制について、現状を把握することができました。体制づくりや支援方法等について、今後も本校のセンター的機能を活用していただき、アドバイスしていきたいと思います。 ・高等学校に在籍する生徒と本校の生徒は実態が大きく違うとは思いますが、支援の実際を知ってもらうことで、高等学校の生徒の障害特性への配慮や個に応じた支援方法等のヒントになり、よりよい支援につながっていくことを願っています。

まとめ

今回は、高等学校教員の研修を目的に、特別支援学校のセンター的機能を活用していただきました。情報提供や概要説明、授業参観を通して、特別支援教育のイメージがより具体化したのではないかと思います。

今回のケースのように、「学びたい」というニーズに応え満足していただけるよう、私たちも専門性を高め、センター的機能を充実させていきたいと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01　障害の特性の理解・実態把握**　　02　個に対する指導 06　ケース会議
概　要	**課題の提出が難しい生徒への支援について**
事　例 提供校	高校：　西部地区　全日制 特支：　袋井特別支援学校磐田見付分校

事例の内容

高校からのリクエスト

・課題の提出ができない、自分の意見を表出できない、数日前の出来事等についての感想や自分の思いを書けない生徒への支援方法があれば教えてほしいです。

特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

・１回目　・高等学校の特別支援コーディネーターが来校し、当該生徒の生活上の困難さ等の聞き取りをしました。その後、課題を出せない理由を把握するためには、課題の内容や提出期限などの理解についての確認が必要であることの助言をしました。分からない場合の支援として、視覚的支援について具体的に説明しました。

また、実行機能に課題があると捉え、後日、実行機能に関する資料の提供をし、関係教員で共有し生徒理解の一助としてもらいました。

・２回目　・ケース会議へ参加をしました。

１回目の聞き取りより、教育歴や生徒の得意・苦手なことを整理。出来事を覚えるエピソード記憶に課題のある可能性について、プレゼン資料をもとに説明をしました。

（教頭、特別支援教育コーディネーター、該当学年担任、教科担当者）

センター的機能を活用した感想

高校　担当者のコメント

・専門的な助言をいただき、生徒の特性への理解が深まりました。

・自分たちにはない視点から生徒への支援を考えるきっかけとなりました。

・ケース会議の開催など、特別支援教育の進め方に慣れていない中、特別支援学校の先生と話をする中で、どのように進めていくべきなのか道筋が見えました。

特別支援学校　担当者のコメント

・高等学校の支援で数ケースに関わってきましたが、他のケースにおいては、小・中学校までの有効な支援や生徒自身が困難さを解決するための方略を身に付けていたが、当該ケースでは放課後の支援以外の支援や方略等がみえてきませんでした。

・高等学校において、関係する教員が生徒の実態について共有したことは成果がありました。

・今後の課題：１つ１つの課題のみではなく、生徒がなぜ困っているのか、担任、特別支援教育コーディネーター等と掘り下げていきたいです。

まとめ

・当該ケースの場合、私たちの経験則や特性に応じた一般的な支援だけでは、生活上の困難さを改善・克服することが難しいケースであると思われます。

・生徒に関わる全教員が集い、ケース会議等において、情報共有できたのは大きな成果でした。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01 障害の特性理解・実態把握**　　05 学校体制づくりのサポート 06 ケース会議・研究協力特別支援教育に係る情報発信・
概　要	**聴覚障害の理解とロジャー（デジタル補聴援助システム）の正しい使い方の相談**
事　例 提供校	高校：　中部地区　全日制 特支：　静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・当該生徒及び保護者から、「先生の話がよく聞き取れない。ペア・グループワーク時に級友の声がよく聞き取れない」との訴えがありました。また、「コロナの感染状況が落ち着いてきたので、授業中、先生は口元が見えるマスクを使用してほしい」との要望もありました。 ・学校としては、授業中は教員がロジャーを使用し、本人にも聞こえていると思っていました。どう対応したらよいでしょうか。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・高校訪問、当該生徒の授業観察 ・授業担当者等への講義（聴覚障害者の聞こえ方、人工内耳の仕組、ロジャーの使い方指導） ・大学入学共通テスト出願・受験時、配慮願申請等の情報提供

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・聴覚障害の聞こえ方の体験や人工内耳の仕組を理解することをとおして、当該生徒への理解が深まり、より深く寄り添うことができるようになりました。 ・配慮すべきことやその方法を直接見聞きすることができ、授業等ですぐに実践し、本人も教員も効果を実感でき、センター的機能の活用が役立ったと誰もが感じることができました。 ・口元が見えるマスク「顔が見えマスク」を紹介されました。さっそく学校で購入し当該生徒の授業担当教員は全員着用して授業をやるようにしました。 ・当該生徒は「私の主張」で自身の障害を告白し、全校生徒の前でスピーチした。この様子を生徒の母校であり、今回の支援の依頼先でもある静岡聴覚特別支援学校に zoom で配信し、交流を図ることができました。
	特別支援学校　担当者のコメント
	・中学部から送り出した生徒の支援が引き継がれ、当該生徒の成長ぶりも見られたことなど、有意義な機会となった。本人も出身校の教員からサポートが受けられ安堵した様子でした。。 ・人工内耳による大学入学共通テスト（英リスニング）の受験可否について、今後も情報収集して、高校と共有していくこととしました。

まとめ

　専門的な助言を受け、聞こえにくさが改善したという成果を生徒も教員も感じることができた好事例です。今回の支援を機会に、両校の関係が継続し、生徒に対する支援が継続していることもよいです。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事　例 項　目	**01 障害の特性理解・実態把握**　02 個に関する指導
概　要	**授業の内容が分からなくなるとイライラしたりふてくされたりして、その気持ちの切り替えができず引きずってしまう生徒への対応**
事　例 提供校	高校：　西部地区　全日制 特支：　浜名特別支援学校

事例の内容	**高校からのリクエスト**
	・板書を写すことが困難で、イライラしてしまい、余計に分からなくなる。教師が指摘するとふてくされてしまう。ふてくされると気持ちの切り替えができず、引きずってしまう。 ・教師の質問の内容や意図が伝わらず、ちぐはぐな会話になることがある。そのことを友達が指摘しても反応がない。 このような生徒にどのように関わっていけばよいか。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・電話による相談　高校訪問 ・訪問時に高校での特別支援教育に関する体制や教員の意識について管理職、特別支援教育コーディネーターと情報共有

センター的機能を活用した感想	**高校　担当者のコメント**
	・今後も、授業見学に来て、担任からの相談に乗ってもらいたいと思います。 ・発達障害なのかどうかを判断するための情報提供や行動の見立てについての助言が欲しいです。
	特別支援学校　担当者のコメント
	生徒の行動の見立てとして ・言葉の理解や表出面でつまずき(苦手意識)があるかもしれません。 ・これまでの経験から、友達から指摘されていることに気付かないふりをして、嫌な気持ちになることを避けているのかもしれません。 ・教師からの関わりに対してふてくされるというリアクションは、教師に関わりを求めていると考えます。 ・板書を写すのが苦手だったり、質問に適切に応えられなかったりなど上手くできないことを自分で分かってはいるが、その感情を適切な言葉などで表に出せずにいるのかもしれません。 **関わり方として伝えたこと** ・中学校での様子を情報提供してもらい、他の先生方と情報を共有するとよいと思います。 ・生徒が「ヘルプ」を出せるように「困っているところがないですか？」「分からなかったところはありますか？」などさりげなく言葉をかける等、分からないこと、困っていることを言ってもいいんだということを生徒が感じられるようにするとよいと思います。

まとめ
特別支援教育を難しく考えることなく、すぐにできることを他の先生方と連携、協力して生徒に関わっていくことが大切だと考えます。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。